がよいので廣い河の中程まで波が立つ。釜で焚く石炭の火が少しみえて眞黑い人影が動く。二人なのか三人なのか見分けがつかぬ。煙突の烟は眞直に立つ。後に繋いだ五艘の船には角材がギッシリつんである。一番先の船には小さな青い火が螢の樣に明滅する。どの船にも一人か二人のつて靜かに引かれてゆく。約束されただけの仕事を素直にした人連の魂が召さるゝ時の如く。

川下の方では二三十間離れて船が舶つてゐる。昨夜そこで寢たのであらう。今洗つたらしい襁褓がへさきに干してある。朝飯の用意であらう。烟が立つて昨夜赤い灯のもれてゐた板のすき間から立つたり坐つたりする人影が見える。帆を疊んで片肌ぬぎの女が艫を押しながら下手へゆく船もある。粗朶を滿載して川の中央(まんなか)を勢よく下る。裸一貫の男の兒が米を入れた籠を持ち出して長い柄の杓で川水をしやくり入れる。思ふ樣にくめぬらしい。

柳の下を出て井戸端に引きかへすと左手のもろこし畑ではもう家主の老婆さんが土をかへしてゐる。濁流(みづ)の乾いた處が白く半分程殘つて打ちかへされたチョコレート色の土は息をする樣に見える。

裏の小山まだくらい。下の方は家々の炊烟で薄紫にぼかされてゐる。東を負うた山なのでほの紅い空にくつきりと梢の輪廓が見えて親しみのある樹丈は見當がつく一番高い松の樹の下に白い花が返り咲きしてるのも見える。井戸端には露を一杯もつた茄子と里芋とが大きな笊の中に入れて置いてあつた。家主の娘は古い桶で茄子の朝漬を洗つてゐる。昨日結つた銀杏返しが少しみだれてゐた。顏をあげて會釋した時に心もち痩せて見えた。桶の中の茄子の色はいかにもきれいであつた。

タオルの端が觸つて鳳仙花がハラハラと散つた。

（市川にて）　三、九、八

駿岡花卉

鬱南隔溪爲駿岡。瓦屋櫛比鱗次、長堤蔽之、疎柳綠草、點綴以花卉、有天然野色。風景比墨堤。更覺蒼淡。　（鹽谷岩陰）